正論

見通し暗い海部政権の対応

日米関係を英国から見ると

元駐日英大使 サー・ヒュー・コータッチ

<<< 泥沼にはまった構造協議 >>>

米国では日本に対する「修正主義的」感情の波が高まり、米政府は日本に対して管理貿易政策を採用しかねないところまできているようだ。そうなれば日本にとって大打撃だし、国際貿易体制とガット（関税貿易一般協定）のいわゆるウルグアイ・ラウンド交渉にとっても悲惨な結果になるだろう。世界の自由貿易のために、同ラウンドが水没しないようにすることが不可欠である。

「修正主義」とは日本たたきの婉曲な言い回しで、日本および日本人が圧力や刺激に対して他国とは異なった反応をする、という考え方から出ている。この考え方をあおったのは、カレル・ファン・ウォルフレン著『日本の力の謎』だった。同著は的を射た記述もあるが、バランスを欠いた議論が多く、日本に対しフェアではない。だが、そうした議論を許したのは日本人自身であることを認識しなければなるまい。日本並びに日本人は実にユニークなのだ、と主張する日本人が多いが、それは危険なまでにナンセンスだ。戦前の超国家主義や人種主義のにおいさえする。

不幸にして日本の政治家と官僚には、急速に進むコミュニケーションと相互依存の現代世界で、さらに国際性が求められている意味を理解できない者が多い。日本の貿易交渉当局者は、ぎりぎりの瞬間に、しかも卑劣な方法で譲歩し、狭量かつ強情に自分だけに都合のいい利益を追求するので、相手側の怒りと猜疑心を買ってしまうと評判になっている。

現在行われている日米構造問題協議は、泥沼にはまってしまったようだ。日米双方とも互いに要求と不満を突き付けているが、私には、米国の対日不満には多くの根拠ある問題点が含まれているように思える。流通では、時代遅れの中小規模店舗保護をやめるべきだ。銀行制度は、業績の悪い銀行を保護する規制で包まれている。少額預金の利子率は、ただちに自由化し、銀行は週末も含め何時でもサービスして競争するようにさせなければならない。

行政改革は中曽根政権下である程度進められはしたが、その後、官僚は許認可権限をがっちりと握ったままだ。新内閣は行革の新キャンペーンを後援し、これが挫折させられないようにしていかなければならない。

日本では生産者は過剰な保護を受け、消費者を代表する者が少ない。新政府は消費者問題担当大臣を新設して有力閣僚の一人に加え、消費者に必要な変革を要求できる権限を持たせればよかった。官房にできるのは、米国のに比べると歯の抜けた猫のような公正取引委員会の権限を大幅に強化することであろう。その委員には、天下りを待っている古手官僚ではなく、消費者の権利を断固擁護しようとする者を充てることだ。また日本には、優秀で自立心に富む法律家たちがいる。田中角栄裁判の検事を務めた一人を任命してみてはどうか。

<<< 単純愚直な石原氏の提案 >>>

外需型の成長から内需型へと移行するために、日本では多くのことが行われてきた。工業製品の輸入は増えているが、日本政府はまだ、日本市場が完全に自由だとは言えないでいる。農業の自由化はEC（欧州共同体）の場合より貧弱だ。党派を問わず日本の政治家は消費者を無視している。兼業農家や小規模農家の特権を犠牲にしても都市の住宅供給のためには劇的な措置が必要だ。農家への補償は行政改革の促進で浮いてくる節約分でまかなえるはずだ。自給自足を盾に米の輸入はできないという日本の主張は、どうみても納得がいかない。現在の人口からすれば日本は食糧や原材料の輸入なくして生存は不可能だ。日米問題は、石原慎太郎氏のような政治家の耳障りなナショナリズムによって悪化している。日本はチップ製造技術をソ連に売却することによって独立性を示威すべきだ、という石原氏の提案は、単純愚直であり、東欧の変化から見てどっちみち時代遅れである。

他国に対して攻撃的な態度をとることは、国内で支持をとりつけ、外国人を圧倒する最善策だと考えている官僚もいるらしい。最近ロンドンで開かれたウルグアイ・ラウンドに関するシンポジウムでは幻滅を感じた。日本側発言者の一人である元通産官僚が絶好の機会とばかりに、米国の包括貿易法スーパー三〇一条と一部日本メーカーに対するECのダンピング防止関税を攻撃していたからだ。アメリカ人や英国人の参加者は、それに反撃するよりは、建設的討議に没頭する方を選んでいた。海外投資でも、もっと神経を使い、もっと国際性のある思考をすべきだ。

<<< 今こそ行動する時なのに >>>

今度の総選挙は不幸にも、日本の対外イメージ改善には何もできなかった。票の買収や金権政治の報道で日本の政治家の評判はさらに落ちた。衆参両院間にはコンセンサスがなく、保守派が権力を謳歌するふうにはまだ思えない。しかし、もし日本が一九九〇年代のニーズに対応していくならば、権力は想像力と意欲に満ちた新世代へと急速に移行し、日本の政治生活に変化をもたらすことになっているに違いない。

行動せよ、というのは何も私がいま言い出したことではない。国際感覚を備えた多くの日本人の友達の考え方と同じだ。だが、日本の新政府が効果的な行動をとっていけるかどうかとなると、見通しは暗い。

討論のひろば

教育・受験

数学教育を見直すべきだ

大学助教授 西山豊 41（大阪府堺市）

学習指導要領改訂にともない出版社から数学教科書の執筆依頼がきた。

私は生まれつき数学が好きで、大学入試にはそれほど苦労しなかった。数学を制する者受験を制するといわれるほど、数学は受験生を苦しめている。

依頼を引き受けるのに思案した。教科書には検定があり、自由に書けない。今の数学は「受験の数学」でしかない。コンピューターを数学にそのまま持ち込めば、数学嫌いをますます加速するだけだ。

大学入試には形式、内容を問わず大いに疑問がある。思考力を試すというより、計算ミスをみるという傾向が強い。かつて高石友也が『受験生ブルース』で歌っていたように「サインコサインなんになる」と今でも思っている。こんなものなくても立派に生きていける。

問題と答えの距離のことがよくいわれる。昔は問題があって答えがなかった。考えることによって力がついた。今は答えが全部用意されている。問題と答えの距離がなくなると、問題が問題でなく答えが答えでなくなる。生徒はマル暗記するから、数学は「論理的思考」を養う学問でなく、単なる暗記物になる。

この傾向はコンピューター時代の思想を反映している。コンピューターは記憶容量と演算速度で性能が決まる。人間はより多くのことを覚え、より速く答えることを要求される。ここには人間が本来もっている「考える」という行為がない。

問題があって答えが幾通りもあるというのは、遠山啓の「氷が溶けると何になる」に代表される。ほとんどの生徒は「水になる」と答えたが、「春になる」と答えた生徒がいたという。

そこで提案。「問題をつくって答えをだせ」というのはどうだろう。生徒は問題をつくる喜びを覚え、またおのおのの個性があらわれて面白い。

ではどういう問題をつくるのか。数学の幅を広げればよい。「二十㌢の板がある。これを三等分したい」とすれば、二十㌢を三とせず定規を斜めにずらし二十一㌢を使って三等分すれば平行線の定理でできる。「電話帳に折り目をつけて、はみだす折り方はできるだろうか」。これは図形問題である。こういう問題は生活を見わたせばごろごろしている。

数学が入試に特別扱いされることなく平凡な一科目となることを願い、執筆陣の一人として加わることにした。

勉強で養分吸収 花を咲かせよう

主婦 高田尚美 30（京都市北区）

中二の時、担任の教師に呼ばれたことがある。

「最近、成績が思うように伸びていないようだが、何かあったか」と聞かれ、「なぜ勉強などしなければならないのか、分からなくなって来たのです」と答えたのを覚えている。

教師はしばらく下を向いていたが、「植物は水だけでも育つけれど、土の中の養分を吸収することによって見事に枝葉を茂らせ、美しい花を咲かせることができるのだ」と語った。

家に帰ると、すでに学校から連絡を受けていた父が「疑問を持つことはよいことだ」と言い、「あるパーティー会場にいくつものテーブルがあるとする。今のお前ならそのうちのいくつかのテーブルの人しか話はできない。だがもし、いろいろなことに目を向け教養を積んだお前がそこに行けば、あらゆるテーブルの人と話ができ、自分の意見を述べることができるだろう」と話してきかせた。今でもその二人の言葉は、私の向上心の源となっている。

公教育不振、文部省の対応は

教員 志田倹 54（三重県松阪市）

近ごろ公立校が怪しくなってきた。中学はもとより高校もである。東京圏や関西圏だけでなく、地方にも私立校の進出が目立ち始めている。

ついこの間までいわば"ワル"を集めていた私立高校が、徐々に進学校に変身しつつある。そして下に付属中学を新設しているから強い。小学校高学年の親は、微妙な動きを見せながら私学に向かって駆け出す。

恐るべき大学進学熱である。これも「就職」を頂点にしての事情なのである。大手の企業に入社することが大団円で、これを満たすためには著名大学をめざさなければならぬという軌道が、あまりにもはっきりと敷かれている。

さて、この種の路線に乗るには、それなりの手だてが要る。当たり前のことをやっていても、どうにもならない。

まずは中学も高校も私学がいい。私立校ではターゲットに忠実であり、それにそぐわないぜい肉は見事に切り捨てられている。当世は余分なことに手を出していたら、目標達成もおぼつかなくなる。

それにしても文部省は、公教育の退歩になんの反応も示さないのだろうか。今は黙して語らずといったところである。日本の将来をおもんぱかると、英才教育も不可欠と睨んでいるのだろうか。今、公立校が危ない、のである。

不可解だった海部氏いじめ

予備校講師 小泉貴 64（東京都北区）

政治家と、それをとりまく世界の「文法」がさっぱり分からない。

普通の文法に従えば、今回の衆院選挙で自民党が予想を上回る"勝利"を収めたのは海部首相という顔があったればこそと思われるのに、その海部氏が自前の内閣を作ろうという段になると、いきなり自党の仲間内からの"いじめ"が集中した。

"海部をもり立てよう"という気は起こらぬらしい。それを伝える情報までが、こじゅうと風に"海部には指導力がない"という決めつけ方を彼らの紙面を使って連発したのである。

普通人の文法なら、この選挙の結果からいって、今は何をおいても海部氏にその指導力とやらを発揮させるよう周囲がもり立てると考えたと教えているのである。そういう常識が届いていないらしい政治家村の住人たちの文法が分からない。

"いじめ"は、しばしば正義の顔をしてまかり通る。きのうきょうの新聞人たちも、それをやっていないと、自信を持って言えるだろうか。

談話室

もも

入閣めぐる派閥攻勢に怒る

無職 清水政平 71（千葉県市原市）

国民は自民党の安定政権と消費税見直しを期待して、海部内閣の公正な人事を心から願っていた。

にもかかわらず、醜い派閥間の争いから議員数で割り当て人数を要求し、ロッキード関係者まで強引に入閣させようとする派閥の動きまで出てきた。

しかも六回以上当選しないと入閣の資格がないとか、小派閥に属する海部首相としては各派閥の長老にあやつられて、その指示通りに動かないと首相の首まで危ないとか―これで立派な政府ができるだろうか。私は首相に指名された以上、絶対的権限が与えられるべきものだと思う。党三役を交えて首相が決定できる人事であって欲しい。

派閥解消と叫んでいても本質的に何ら変わらず、自分の派閥の勢力にだけ執着している自民党の体質。派閥を超えて有能な人材が入閣できる人事、そして新しい自民党に生まれ変わる時はいつなのか。

それにしても、今回の人事にはがっかりしてしまった。

再任された中山外相に期待

無職 佐藤誠一 75（静岡市）

大方の予想どおり中山外相が、第二次海部内閣で再任された。とかく閣僚人事というと、派閥力学が作用して首班の意に染まぬ人物でも、閣僚に起用せざるを得ない場合が出がちである。

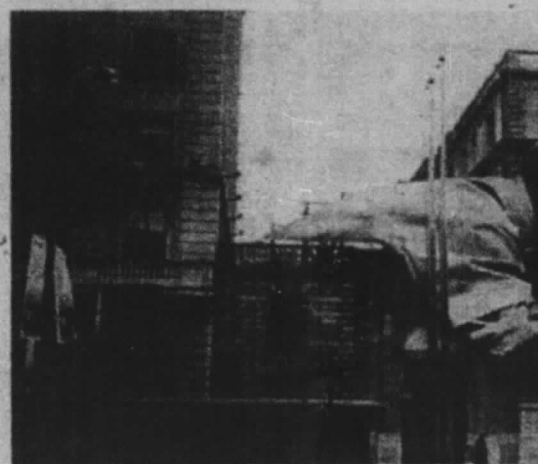
こんどの閣僚人事で、どこまで海部色が出しきれたかは、立場により、また人によりも解釈が異なろう。しかし少なくとも蔵相とともに外相人事に関する限りは、海部首相の意向が大いに反映し生かされたものと見てよかろう。

中山氏は第一次内閣で外相に就任するまでは、それほど目立った存在ではなかったような気がする。それを就任以来、とにかく精いっぱいこなして、再び今日の栄をかち得たものといえよう。

が、こんどは二度目の正念場である。世界は今、目まぐるしく変わりつつある。寸時の緩みも許されない。経済大国としての任も重い。それだけ他国からの注文や希望も多い。

同相としても再任にあたり期するところ多かろう。ぜひ衆望に見合った抱負を望みたい。

撮りました



ヨーロッパへ二、三カ月前に旅行したおり、スペインのある町の一角で見かけた。

ビルに覆いかぶさる巨大な人間像に思わずシャッターを切りましたが、歩道の人間が小さく写って、金属製のように見えました。

信太恵子 56（東京都杉並区 主婦）

アピール

患者さんにお願い四つ

医師 藤原寿則 51（松山市）

全国的なインフルエンザの流行で、診療所は混雑しています。私たち医師は、限られた時間内に、患者さんたちの症状や所見を迅速に、しかも的確に把握し、一人ひとりに対する薬を考え、注射や処置を決めなければなりません。

そのために、患者さんたちに協力して頂きたいと常々考えていることがいくつかあります。

まず、医師の質問に要領よく答えて欲しいのです。こちらの質問には耳を貸さないで、病気と関係のない家族のことや、世間話などを長々と話す人がかなりいます。病気の経過や、現在の状態を聞きだすことを「問診」と言いますが、ある著名な内科医によれば、問診によって病気の大部分は診断できる、とまで言われているほど大切なものなのです。

次に、手軽に診察ができる服装で受診してほしいのです。和服姿で診察にくる婦人もいますが、脱ぐにも着るにもずいぶん手間取り、スムーズな診療のリズムを乱すものなのです。

待合室で、大声で話す人が多いのも困りものです。

自然界の食物連鎖を断つな

高校生 森本聖子 16（奈良市）

野生動物の数が減ってきている。減少を防ごうと、人間